

『四海茫茫』

98 開国、亡国、独立

アメリカに「日本の聖地」というべき場所が2つある。東岸のポーツマス(ニューハンプシャー州)と西岸のサンフランシスコ(カリフォルニア州)だ。

日露戦争(1904~05年)に勝利した日本は1905年(明治38年)9月5日、ポーツマス海軍造船所で日露講和条約に調印した。東アジアの小国、日本が超大国のロシアに勝ったということで世界中が驚き注目した。日露両国間の調停に尽力したのはアメリカの第26代大統領、セオドア・ルーズベルト。

同大統領は新渡戸稲造が英文で著した『武士道』の愛読者として知られ、「日本最良であった」と伝えられている。ついでながら、ぬいぐるみで有名なテディベアはこの大統領に由来する。

ルーズベルトを調停へと動かしたのは伊藤博文の秘書官だった金子堅太郎。金子にはハーバード大学(米国マサチューセッツ州ケンブリッジ市)留学の経歴があり、そのときルーズベルトと同窓だった。良き調停役を得て渋るロシアも遂に折れ、日本は講和を手にした。ルーズベルトはその功績を称えられ、ノーベル平和賞を贈られた。

ポーツマス条約の交渉、調印に臨んだ日本側の代表は、「明治外交史上の巨人」とされる小村寿太郎。彼にはハーバード大学留学とニューヨーク法律事務所実務研修を受けた経験もあり、後に次のような談話を残している。

「米国人の魂は真正の武士の魂である。弱い者を愛してやる。彼等の魂は名誉と義侠の念に満ちている」

武士出身の小村がアメリカ人を「真正の武士」と称揚している。

ポーツマス条約は近代化を果たした日本がさらなる飛躍を果たすためのスプリングボードになるはずだった。が、そうはならなかった。ロシアとの勝ち戦に日本の大衆は酔い痴れ、講和の果実が小さいことを憤って暴動まで起こした。そして軍部は奢った。結局、支那事変を経て大東亜戦争へと戦線拡大の道を突き進み、弓折れ矢尽きて1945年(昭和20年)8月14日ポツダム宣言を受諾、同9月2日東京湾に停泊していた米戦艦“ミズーリ”上で日本降伏文書に調印した。ポツダム宣言受諾の事実は翌15日に公表(玉音放送)され、日本はこの日を終戦記念日とし、勝利した連合国は日本降伏の9月2日を対日戦争記念日としている。

翻ると日本に開国を迫ったのはアメリカ。1853年(嘉永6年)ペリーが来航し、翌年に日米和親条約を結んだ。開国と亡国の2大事件はいずれもアメリカに深く関係している。さらにいうと、日本の独立もアメリカの力によるところが大きい。

敗戦後の日本は連合国による分割占領統治が行われた。連合国というのは米、英、中華民国、ソ連を指す。これら4国は北方領土をソ連、中国大陸および台湾を中華民国、その他は主にアメリカという形で日本を分割統治した。1946年(昭和21年)に日本国憲法が成立し翌年施行されたが、主権は日本になかった。

この“くびき”から解放されたのは1952年(昭和28年)4月28日。この日、第2次世界大戦における連合国と日本の間の平和条約がサンフランシスコで締結された。これを通称、サンフランシスコ講和条約という。ここに国際法でいうところ



サンフランシスコ市

の戦争状態が初めて終結し、占領統治も終わった。日本は再び独立と主権を手にしたわけである。その舞台がサンフランシスコだった。

日本とサンフランシスコの因縁は深い。ペリー来航から7年後の1860年(万延元年)、日米修好通商条約の批准書を交換するため江戸幕府の遣米使節団が日本を発った。太平洋横断に用いられたのは米軍艦“ポーハタン号”と幕府保有の軍艦“咸臨丸”。咸臨丸には勝海舟(艦長、正確には軍艦操練所教授方頭取)やジョン万次郎、福沢諭吉などが乗船していた。着いたところがサンフランシスコ港。この街の郊外に日本人墓地があり、そこに咸臨丸に乗船してアメリカにやってきた日本人水夫3人の墓がある。いずれも乗船中かサンフランシスコ滞在中に罹病し亡くなって埋葬された。名を峯吉(長崎出身)、富蔵(塩飽諸島出身)、源之助(塩飽諸島出身)という。このようにサンフランシスコには日本の開国と独立にまつわる人々の足跡が色濃く残されている。

講和条約に臨み、日本の独立と主権回復に功があったのはもちろん吉田茂だが、本欄前回に登場した山縣勝見氏もサンフランシスコで日本海運再生の礎を造るという大仕事をやってのけた。

(瓜生隆幸)